

<VI 展示研究報告 (4) >

令和3年度第12回企画展
「学生成果展」

江良 智美*¹ 佐々木 麻紀子*² 立川 泰史*³ 富田 弘美*⁴
馬場 美和子*⁵ 深石 圭子*⁶ 江川 賢一*⁷ 加藤 理津子*⁸

令和3年度第12回企画展「学生成果展」(会期：令和4(2022)年2月24日(水) - 4月22日(金))を開催した。内容は学生の卒業制作や実習・演習で制作した作品や研究報告を紹介している。

1. 現代生活学部生活デザイン学科

江良 智美

ハンドクラフト演習B

ハンドクラフト演習Bは、テキスタイル製品の装飾技法の一つである刺繍について発展の歴史や文化的背景の知識を深めるとともに、作品制作を通して代表的な刺繍技法を学ぶ科目である。さらに、各種技法を組み合わせたオリジナルの応用作品の制作や作品についてのプレゼンテーションを行い、ハンドクラフトについての理解を深めている。

4年次前期の開講科目であるため、4年間のこれまでの学びをさらに深めたい学生が履修している。



写真1 展示風景

令和3年度は、様々な刺繍技法を用いた刺繍作品を制作し、学生作品展では田村瑛里香さんと中村友梨香さんの作品を展示した(写真1)。

・ユニコーンのクロスステッチ：クロスステッチの基本的な技法を学ぶ。刺繍が初めてであっても一針一針で徐々に模様が浮き上がってくる楽しさがわかるカラフルな作品である(写真2)。

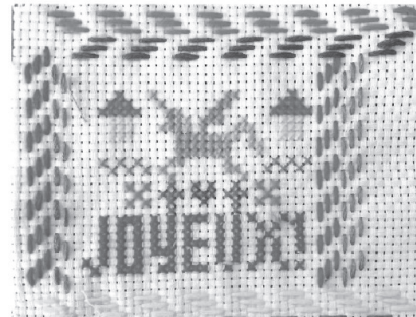


写真2 ユニコーンのクロスステッチ(田村瑛里香)

・リボン刺繍の小さな壁飾り：リボン刺繍のいくつかの技法を合わせて作品を制作する。リボン刺繍は立体感があると同時に触感もあり、新しい表情が表現でき



写真3 リボン刺繍の小さな壁飾り(中村友梨香)

*¹ 江良 智美(えら さとみ) 令和3年度現代生活学部非常勤講師
*² 佐々木 麻紀子(ささき まきこ) 令和3年度現代生活学部生活デザイン学科助教
*³ 立川 泰史(たちかわ やすし) 令和3年度現代生活学部児童学科教授
*⁴ 富田 弘美(とみた ひろみ) 令和3年度現代生活学部現代家政学科准教授
*⁵ 馬場 美和子(ばば みわこ) 令和3年度現代生活学部非常勤講師
*⁶ 深石 圭子(ふかいし けいこ) 令和3年度現代生活学部生活デザイン学科准教授
*⁷ 江川 賢一(えがわ けんいち) 令和3年度人間栄養学部人間栄養学科教授
*⁸ 加藤 理津子(かとう りつこ) 令和3年度人間栄養学部人間栄養学科准教授

る作品である（写真3）。

・フランス刺繍の巾着袋：フランス刺繍の基本的技法を学ぶ。中村さんの作品は、ロング&ショートステッチやレザー・デイズステッチ、フレンチノットステッチなどを用いて表現したい動物や草花それぞれの質感や表情を表している作品である（写真4）。



写真4 フランス刺繍の巾着袋（中村友梨香）

・ビーズ刺繍のアクセサリ：ビーズ刺繍の技法を学び、同系色の色相で異なる質感のビーズで構成する。田村さんの作品は、ビーズの方向を利用したデザインで、ピアスはビーズの方向を揃え、ブローチは大小のビーズをバランスよく配置した作品である（写真5）。

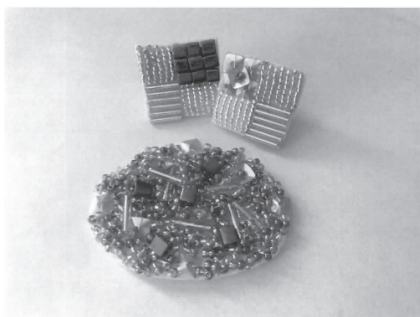


写真5 ビーズ刺繍のアクセサリ（田村瑛里香）

・イニシャルのペンダント・ヘッド：これまで学んだステッチ・技法を使った応用作品となる。小さな枠の中でイニシャルと植物をバランス良く配置した華やかな作品である（写真6）。



写真6 イニシャルのペンダント・ヘッド（田村瑛里香）

・カルトナージュ・ボックス：四方から見て異なるデザイン、パッチワークキルトの技法を用いた応用作品である。中村さんの作品は、梅雨が終わり夏の訪れを喜ぶ動植物をカエルやウサギ、花々で表現した作品である。サテンステッチやブランケットステッチなど表情が出るような技法を用いている（写真7）。



写真7 カルトナージュ・ボックス（中村友梨香）

2. 現代生活学部生活デザイン学科

佐々木麻紀子

生活デザイン演習C/D

生活デザイン演習C/Dは、生活デザイン学科の専門分野の内容を体験的に学ぶために、各教員の授業の補完的または発展的な内容の授業や、学外学内のイベントへの参加、学外見学などのプログラムを実施する科目である。内容は、プログラムを設定する教員によって異なり、複数のプログラムが設定されている。

染色プログラムは2講座あり、2年次前期の生活デザイン演習Cでは、板締め染（写真1）・摺込み染（写真2）・墨流し染・絞り染・ろうけつ染・電子レンジ染（写真3）・染色工房で東京都伝統工芸の一つである江戸更紗染など様々な染色技法を体験し小作品の制作を行った。（写真4）昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の影響があり、授業が対面と遠隔が交互に行われるハイブリット形態の授業も取り入れられていた中、少人数で行われた。

学生が初めて体験する染色技法も多いため、授業では1つの染色技法について、試作の時間1コマと作品制作の時間1～2コマを使い、学生がそれぞれイメージするものを試行錯誤して作品制作を行っている。この試作の時間を取ることで技法への理解が深まるとともに完成度の高い作品を展示できたと考えている。

2年次後期の生活デザイン演習Dでは、天然染料を使って絹布を染色し染色堅ろう度試験を行ったうえで、各自の好みの染料で絹シフォンストールの染色作

品を制作した。大学にある染料だけでなく、学生各自の家から染料となるものを探してサンプル染を行ったため、数多くの色見本が制作できた。大学だけでなく家庭で行う場合も考え、電子レンジを使った抽出や染色工程なども取り入れて媒染剤の扱いや加熱の方法等、通常行われる加熱浸染法ではない染色方法も試し、それぞれの染料について紫外線や洗濯、摩擦、アイロンなどの染色堅ろう度試験を行うことで変退色を確認したため、天然染料を使った染色への理解が深まった(写真5)。

展示したストールは、無地染だけでなく、絞りを施したりムラ染にしたりと学生の個性が表現されている作品となった(写真6)。



写真4 江戸更紗染の染色工房での作業風景

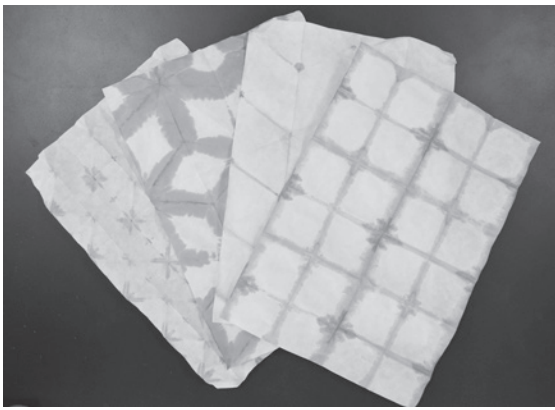


写真1 板締め染の和紙

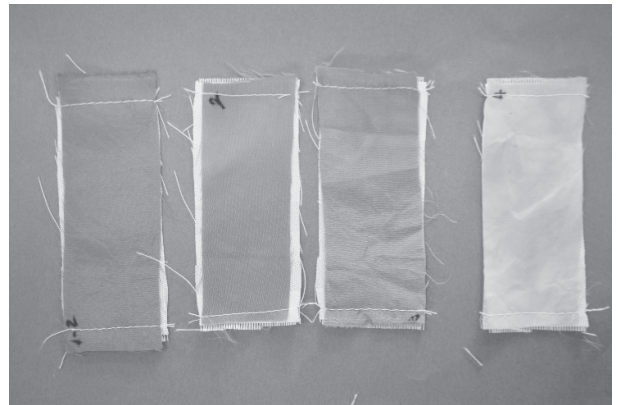


写真5 染色した絹布の一例(左からスオウ、アカネ、ブドウ、タマネギ外皮)



写真2 摺込み染のポストカード



写真6 展示風景



写真3 電子レンジ染のエコバッグ

3. 現代生活学部児童学科

立川 泰史

図画工作科教育

1. 「図画工作科教育」という授業について

「図画工作科教育」の授業は、小学校の教諭を目指す学生を対象に、この教科教育の意義と基礎的な知識及び基本的な技能を学ぶ資格科目として位置付けられ

る。この授業は、次年度に学ぶことになる「図画工作科教育法」へ向かういわば“助走路”にあたり、教科の内容領域にある魅力や楽しさを体験的に理解することが目標となっている。図画工作科という教科学習は、前段階に幼児の造形表現活動があり、後には中学校・高等学校における美術科・工芸科につながる。しかし、こうした異校種間を超えた教科内容のつながりや一貫した指導目標をもつという属性は、別々に指導法を学んでいる限り、学生にはなかなか理解しがたいところがあるのも事実である。そこで、本授業では、小学校における図画工作科学習が、幼稚園の表現領域とどのように連携する内容をもつのか、小学校高学年での造形体験や創造的な思考の発達が中学校美術科や高等学校の芸術教育へとどのように発展していくのかなど、そのような視点をもちながら造形表現や鑑賞活動を体験できるように工夫している。

2. 小学校高学年の題材で味わう「つくり出す喜び」

写真1は、現行の文科省検定教科書にも掲載されている小学校高学年（5年）の造形題材である。この題材で使用する主要な用具として、電動の糸のこぎりがある。学校では標準備品とされ、誰もが小学校で経験する用具でありながら、大学生にもなると「もはや懐かしい用具」として映るように、日常生活ではなかなか触れる機会のない機材である。こうした特殊な工作機器や用具を実際に手にとり、子どもたちが安全かつ効率的に使えるようになるための指導を思案していくことになる。

また、こうした表現活動では「つくり手にも予想出来ない形」が立ち上がる驚き、偶然にできた形を組み

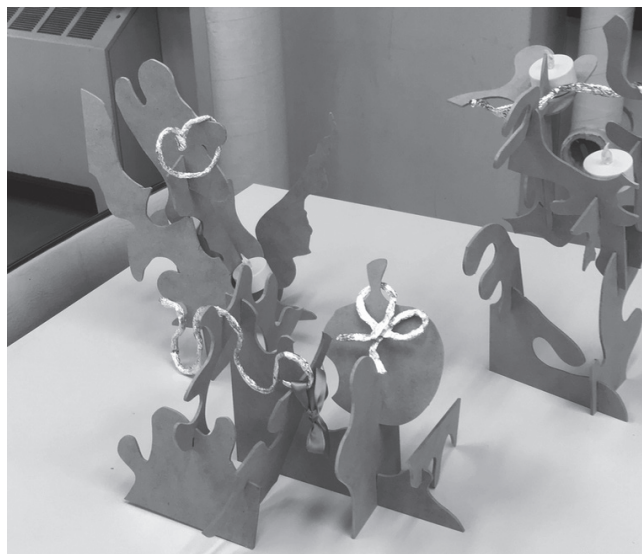


写真1 自由に切った形の組み合わせを楽しむ

作品画像提供：2094108 大澤ひかる

合わせて楽しむといった「つくり出す喜び」を実感することになる。こうした体験を通して、造形活動を指導する際の留意点や予想される子どもの姿をより現実的に想い描く資質・能力が培われる。

ここでは、電動糸のこぎりで心地よく木材を切断できるように、木目のない「MDFボード（集成材）」を材料に選んでいることが指導者の隠れた配慮になっている。また、自由な形の組み合わせを工夫する面白さが、単なる遊びに終始しないよう、「アルミ箔との組み合わせ」という副素材が用意されている。こうした目立たない指導者の配慮が、自身の表現に意味や価値を見いだすきっかけをつくっていることに学生も気付く。

3. 領域を超える題材による創造的な思考体験

前述したような表現題材の理解は、材料経験や用具の取り扱いを通して実践的な指導力を培う機会となる。ただ、材料や機器の扱いなどといった「ものづくり」的な技能の取得にこだわってばかりいても、今日芸術教育でめざしている趣旨、すなわち「身近なものによさや美しさなどの自分らしい意味や価値を見出す」という生活者の育成は実現できない。造形的な見方・感じ方、あるいは美的な想像力を発揮し、暮らしの中にある形や色と豊かに関わるというスキルは、「創造的な思考の喜び」に支えられることも知っておきたい。

このような意味でも、表現活動の捉え方を「ものづくり的な側面」から開放し、「意味づくり的な側面」へ着目することも大切になる。「意味づくり的な側面」とは、表現作品の出来栄えに捕らわれず、制作途中に出会う様々な造形的事象を楽しむことに造形活動そのものの意味や価値を感じることである。また、「造形的事象を楽しむ」というのは、例えば「絵の具が水と混ざったり滲んだりする」ような出来事（事象）に立ち会い、移り変わる世界に「よさや美しさ」を見出すことである（写真2）。

こうした題材体験の趣旨は、制作の過程に出会う形や色の変化から感じたことを基に、「次にできること」を試しながら表現の可能世界を広げていく喜びを知ることでもある。それは、作品を必ずしも残さない「造形遊び」という内容領域の中心的なねらいを達成するも、そこで止まらず、「思いついたことを工夫して表わす」という表現の内容領域に越境していく体験でもある。

このように、表現の内容領域を超えて次々とイメージを塗り替えていく体験は、学習指導要領に準拠する



写真2 水滴のなかに、好きな色の絵の具を垂らす

教科書には掲載できない創造的思考の自由さや表現行為そのものの喜びをやる契機ともなっている。図画工作科は、多々ある教科の中の学習のひとつとして位置付けられるが、他方では人々が生まれもっている感性や情操が養われる喜びを実感する活動としても特徴づけられる。他の教科学習ではあまり前面に打出されることのない「創造的な思考の働き」を体験的に理解する場面として、学習指導要領の領域を超える活動を意図的に設定している。

4. 「表現と鑑賞」を一体的・連携的に扱う活動の体験

学齢期にある子どもたちはもとより、本来わたしたちが自由に創造的想像力を働かせていくとき、まず目にした対象や事象が「何物であるか、何事であるか」を見極め、そこで感じたことや認識したことを基に次なる振舞いや所作を決定している。子どもたちが身の回りの事物と出会い、そこから感じたことを基に表現活動に取り組む過程においても、対象を「よく見ること」と「表し方を工夫すること」は一体となって進むという創造的な思考活動の実態が明らかになっている。これは、どんな年齢の子どもでも「自分の手が世界を変えていく様子」を目にしながらか自身の表現を「事象」として鑑賞し、よりよく表わすための手だてを探

究しながら表現するという自然な態度でもある。簡潔に言えば、「みる・つくる・つくりかえる」という一連の造形行為は、「表現と鑑賞」を瞬時に繰り返す認識サイクルを循環する高次な思考活動であると捉えられる。今日、図画工作科の指導に限らず、幼児の造形教育や芸術教育においては、こうした人間の本来的な感覚や知覚体験から生起する認知活動と表現活動の連携的な働きが注目されている。こうした傾向が高まる背景には、人工知能の研究や脳科学、神経美学といった新しくも学際的な先行研究の成果がある。しかし、ここで問題になるのは、未来の指導者たる学生が「表現と鑑賞を往来する思考活動の働き」を経験的理解に導く学習場面をどのように設けるかということである。

そこで本授業では、「表現することで鑑賞の目がひらき、見ることを楽しむことで新たな表現に発展する」というプロセスを踏む造形体験を試みている。こうした思考活動の本質に着目すると、それは「小学校低学年の子どもでも、自然に発揮しているスキルだ」という事実気付くことが要件となる。したがって、学生が「表現と鑑賞を循環する思考活動をたどる本質的な特徴」に気付けるように、材料も活動もシンプルな題材を経験することになっている。ここであげる事例題材では、「身近な場所のよさや面白さに気付き、表現を通して感じたことを伝え合う」という学習目標を体験する。学生たちは、子どもたちでも気軽に楽しんでいる「フロッタージュ（擦り出し）」という表現技法を用いて、身の回りがある場所や物の凸凹をクレヨンで紙に転写するというシンプルな活動を行う。普段は気付かない身の回りがある場所や物のフォルムに隠れているよさや面白さを発見するのは鑑賞の能力の発揮であり、それを紙に映し出していく技法や色選びが表現する能力の発揮場面として設定されている（写真3）。

ここでは、ただ各自が校舎内を見渡すのではなく、誰かがフロッタージュで表現した面白い場所を、他の学生たちが探し当てるといったゲーム性を盛り込んだ。実際には小学校低学年の児童を対象にした鑑賞題材として設定される活動であることが裏付けるように、身近な場所や物を「よく見る」ことが本活動の主な要件となる。あたかも犯人が逃亡した足取りを追うのごとく、刑事役を担う学生たちが映し出された場所や物を探して回るというゲーム感が、活動そのものを楽しむための動機付けになっているのも大きな特徴である。

このように、小学校低学年を対象にした「表現と鑑賞を一体的に扱う題材」の体験を通して、教科の目標



写真3 フロッタージュ表現と鑑賞を往来する活動

に準拠する活動構成、導入から展開に至る実践方法、そして評価の観点について楽しく理解を深めていることがわかる。さらに、身の回りにある隠れたよさや面白さを発見する活動が、2～4人のペアまたは小グループの活動として設定することで、自他の見方や感じ方にある違いにも自然な対話を通して気付いていく「協働的な学習形態」の意味を体験することにつながっている。

5. 教科の体系、発展的な内容領域のつながりを実感する

造形教育や芸術教育において特徴的なのは、他の自然科学と同様に、ほぼ確立された学術体系のなかに位置付けられた学習内容をもつということである。ある昆虫に感じた不思議さが後に生物学という学術体系のなかで探究されるように、またある特別な車の姿に抱いた憧れが機械工学などの学術体系で学ばれるように、造形活動で味わう様々な感性的内容が後にファインアートや工芸、あるいはデザインという芸術教育の体系にそって学ばれる。

このように、学習する内容領域の「体系的なつながり」についても、巨視的な視点をもって扱う題材の位置付けを捉えていくことが望まれる。とくに教職課程において、単独の単元や題材の目標と評価という枠組みだけに学生の理解が矮小化されることなく、学齢期全般から青年期までの発達と学びの体系といった大きな視野から局所的な単元題材の意味を理解することが求められる。またそれが、現行学習指導要領で強調される趣旨でもある。

教科の学術体験における位置付けとつながりを理解するという時代の求めを理解するために、本授業ではあえて教科書に掲載されている題材を活用した。ここ

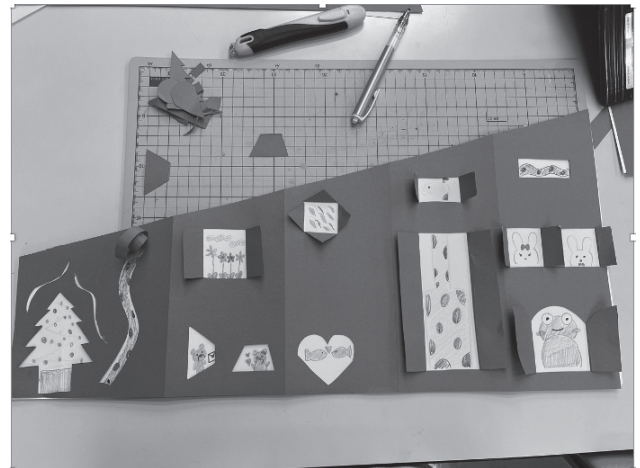


写真4 紙素材の可能性や表現の発展的体系を知る題材経験

作品画像提供：2094112 河西美空

で扱うのは、小学校低学年の児童がすでに慣れ親しんでいる「紙」という素材に触れ、新しい材料の可能性に気付きながら「つくり出す喜び」を味わう題材である。この「まどのあるたてもの」と題する題材は、平面の材料が折ったり曲げたりすることで丈夫になり、立体として立ち上がる不思議さを味わいながら、思いついたことを表わすという内容をもつ（写真4）。

紙という素材に隠れている「弾力」という特性を自然に感じる事がこの題材の主なねらいになるが、木材や金属といった他の素材にも通ずる材料の可能性を秘めること、そうした材料の活かし方が、生活に役立つ工芸や機能美をもつプロダクトデザインの領域にも体系的につながることを実感するという配慮に裏打ちされていることも大切である。

6. 本授業科目における学習成果と展望

図画工作科教育の本授業科目は、小学校の教育実習で実際に指導を行うための基礎的な資質・能力を育むことを直接的な目標にしている。しかし、①つくり出す喜びを味わう、②表現と鑑賞という創造的な思考サイクルを実感すること、③教科学習の内容に内在する学術体系を望む大きな視野をもつことなど、本教科の本質的な特性に触れることは、有能な指導者としての素地となる重要な経験的理解を導く。今後も本授業では、教科学習の基盤にある理念や本質に触れる体験的な活動を重視し、主体的な学習の取組みを支援していきたい。

4. 現代生活学部生活デザイン学科

富田 弘美

舞台衣装のデザイン・制作

1. オペラ『カルメン』第1幕の衣装と頭飾りのデザイン・制作

生活デザイン学科

2019年度卒業生 飯田 真琴 (衣装)

2019年度短期留学生 牛 進 (頭飾り)

このオペラは、1875年ビゼーの音楽によってパリのオペラ＝コミック座で開催された。その時代の女性は、経済的に自立することが許されず、「女性らしく」着飾って父親や夫などの男性から庇護を受けていた。しかし、煙草工場で働くジプシーの女工カルメンは、自分の意志で自由に行動し、誰とでも喧嘩をするような気性の激しい女である。また、真面目な衛兵伍長のドン・ホセを誘惑し、彼の人生を狂わせるような魔性

の女でもある。

今回のこの公演の時代背景は「現代」である。自由奔放なカルメンのキャラクターと粗野な振る舞いは、ワイルドなイメージの黒の皮革（合成皮革ストレッチ）や赤い金属ファスナーを用いて強い印象を受ける黒と赤の対比や、胸元と裾のファスナーの開閉によって挑発的なスリットが現れるセクシーなデザインで表現した（写真1、2）。また、髪飾りは、加工しやすい塩化ビニルのL字型アングル材料で獲物を捕らえるようなイメージから2本のシャープな弓矢を作り、帽子本体に突き刺した。これは、この先の危険な出来事などを暗示させている（写真3）。

この衣装は、地域連携活動として（公財）八王子市学園都市文化ふれあい財団主催の公演で使用した。デザイン・制作は2019年9月から着手したが、新型コロナウイルス感染症拡大のため2020年3月14日のハイライトコンサートが中止になり、その後、2021年1月9日に八王子市いちょうホール（大ホール）にてガラコンサートが無観客およびオンラインで開催された。なお、副資材のファスナーは、株式会社YKKによるご提供である。



写真1 カルメンの衣装 オペラ歌手：二瓶純子



写真2 衿元を開いた状態

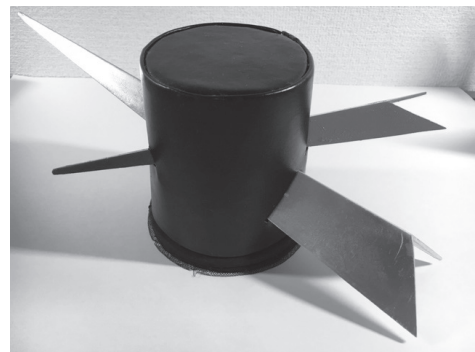


写真3 頭飾り

2. バレエ『くるみ割り人形』金平糖の精の衣装・頭飾りのデザイン・制作

生活デザイン学科 1年生 山本 美久

このバレエは、1892年にチャイコフスキーの音楽によってサンクトペテルブルクのマリンスキー劇場にて開催された。第2幕ではくるみ割り人形であった王子様が主人公クララをお菓子の国に招待し、そのお菓子の国の女王が「金平糖の精」である。「金平糖の精」の金平糖は、ポルトガルから伝わった表面に角状の砂糖の突起のあるお菓子である。他にフランスのドラジェというアーモンドをカラフルな砂糖の衣で覆ったお菓子から「ドラジェの精」、英語では「シュガープラムの精」などとも呼ばれている。いずれにしてもカラフルなパステルトーンでキラキラ輝く可愛い砂糖菓子である。

衣装はスカート部分が水平に広がったクラシックチュチュというもので、ボディスとチュチュ（スカート）で構成されており、チュチュにはギャザーを寄せたチュールが十数段ショートパンツに縫い付けられている（写真4）。生地はシルバーのジャカード織、胸とチュチュの飾り部分とティアラはシュガープラムのイメージから淡い紫のオーガンジーをベースにして、銀色のモチーフブレード、紫・赤紫・銀・クリスタルカラーのビーズやストーンなどが砂糖菓子として散りばめられている（写真5、6）。

この衣装は、地域連携活動として参加した中原由美子氏の構成・演出・振付によるバレエフレイグランド・パフォーマンス第9回公演『くるみ割り人形』全2幕、2021年11月6日、7日、シアター 1010にて使用した。



写真4 金平糖の精の衣装

ダンサー：森 絵里（東京シティバレエ団）
撮影：和田 修



写真5 胸元（左）とチュチュ（右）の飾り



写真6 金平糖の精のティアラ

5. 現代生活学部生活デザイン学科

馬場美和子

ウィービングデザイン演習A/ウィービングデザイン演習B/ファッション・インテリアファブリックデザイン演習

生活デザイン学科では、卓上機や高機を使って、織物作品を制作し、ファッションやインテリアファブリックのデザイン・設計を学ぶ授業を、2年次後期から3年次後期までの間に3科目設定している。

2年次後期に開講されるウィービングデザイン演習Aは、テキスタイル材料学で学んだ織物に関する基礎知識をもとに、卓上機を使用して基礎織の設計及び応用作品としてランチョンマットの製織を行い、テキスタイルデザインの基礎的な理論と技術を学ぶ科目である。授業では、基礎織（平織、斜文織）と「食を彩る」をテーマに、ランチョンマットを制作した。講評会では制作したランチョンマットの上に料理を載せた写真を撮り、プレゼンテーションを行った（写真1、2）。

作品展では料理を載せた写真も同時に展示し、テーマである食を彩るランチョンマットの雰囲気が伝わるようにした(写真3、4)。

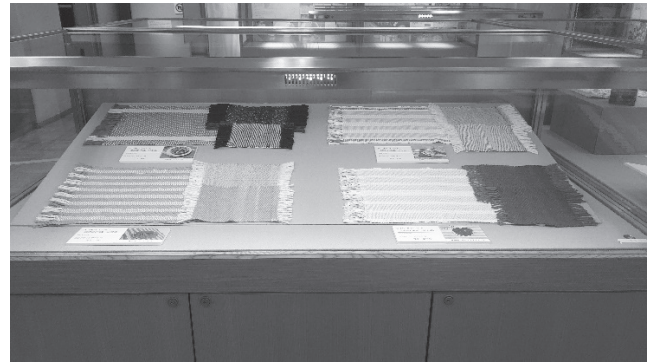


写真4 展示風景

3年次前期に開講されるウィービングデザイン演習Bは、基礎織の応用である変化組織・二重織の技法を学び、卓上機または高機を用いて、技法、糸、デザインを工夫した布を制作し、用途を考える。作品によっては、織った布を天然染料のすくも藍で染色している。授業では、変化組織のサンプル製織、袋織で無縫製の巾着袋を制作している。作品展では、小川夏生さんのすくも藍で染色した巾着袋(写真5)やワッフル織のポーチ、吉野織のテーブルセンターを展示した。

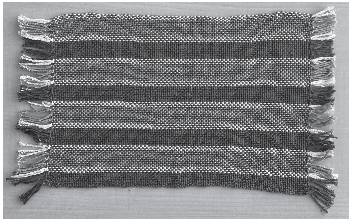


写真1 ランチョンマット(時田菜由)



料理写真
料理写真を載せた写真も同時に展示し、テーマである食を彩るランチョンマットの雰囲気が伝わるようにした(写真3、4)。

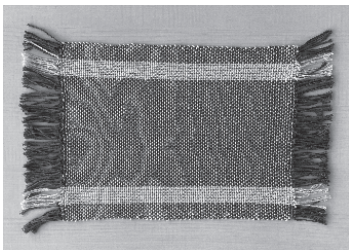


写真2 ランチョンマット(小松花帆)



料理写真
料理写真を載せた写真も同時に展示し、テーマである食を彩るランチョンマットの雰囲気が伝わるようにした(写真3、4)。



写真3 展示風景



写真5 袋織の巾着袋(小川夏生)

3年次後期に開講されるファッション・インテリアファブリックデザイン演習は、ウィービングデザイン演習で織った布や様々な布を参考に、イメージに合ったファッションまたはインテリアテキスタイルの企画を立て、プレゼンテーションボードを作成し、作品制作を行い、用途に応じたテキスタイル設計のプロセスを学ぶ(写真6)。授業では、最初に各自で企画したヴィジュアルイメージボードに沿った織物設計を行い、マフラー・ショールまたはバッグ、クッションカバー、テーブルランナーなどを制作している(写真7)。


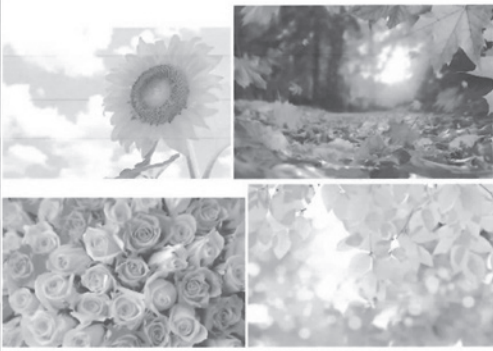
学籍番号 1993112 氏名 小川夏生	
タイトル	Sun & Smile
キャッチコピー	太陽のように輝く笑顔がみんなの元に届きますように
コンセプト	自然の色、太陽や笑顔イメージをオレンジや黄色で表現する。明るい雰囲気にしてこのアイテムを身に付けることによって笑顔になってほしいという願いを込める
アイテム	マフラー
サイズ	26cm幅 172cm長さ
カラーイメージ	
作品の背景 (イメージ画像)	



写真6 イメージボードと制作作品の一例（小川夏生）



写真7 展示風景

6. 現代生活学部生活デザイン学科

深石 圭子

はじめに

生活デザイン学科住生活デザイン分野の卒業研究は、卒業制作と研究論文に分けられ、そのどちらかの方式で指導される。令和3年度は19名中、17名が制作に取り組んだ。設計を選択し、自ら課題を見つけ、それを建築で解決する方法を考察し、作品として表現する。

「トリノモリ 新と旧が混在する上野で鳥と戯れる複合施設」

伊野 文乃

伊野さんは、東京都台東区の上野駅近くで鳥と触れ合える宿泊可能な温泉施設の設計に取り組んだ（写真1）。

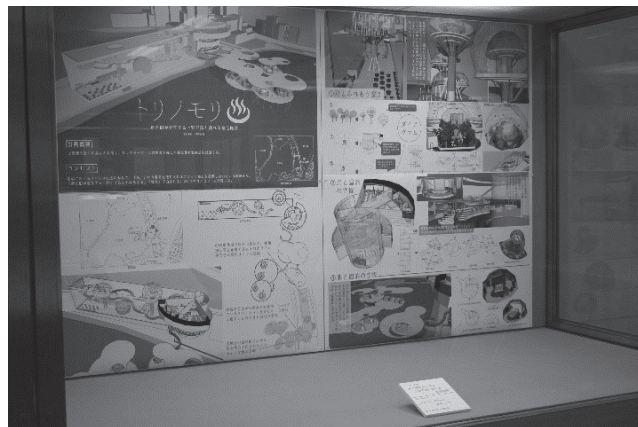


写真1 展示風景

美術館や博物館など歴史や芸術に触れることのできる施設が多い上野であるが、その一方で下町情緒の溢れる町並も所々に残されている。台東区は、東京23区内で最も面積が小さい区にも関わらず、23件の個性ある銭湯が存在する。また、近年は再開発に伴い、多くのビルが立ち並んでいる。本作品は、このように新旧が入り混じる街に、いくつかのモノを掛け合わせることで生まれる新しいモノを見出している。ストレス社会と言われる昨今、心を癒やすことのできる施設を設計するため、作者の好きな「鳥」、「歴史のある銭湯」、そして「泊まる」という行為を掛け合わせた複合施設を提案した。

計画地は、京成上野駅の西側の敷地で、上野の代表的な観光スポットである不忍池を一望できる場所である。施設は、大きく分けて3つの空間に分かれている。一つ目は、熱帯地域の鳥やインコなどの小鳥と種類別

に至近距離で触れ合える鳥の「オアシス空間」である。二つ目は、鳥を見ながら足湯や岩盤浴、バーなどでリラックスでき、きちんと湯に浸かることで心身を癒すことのできる「温浴空間」である。そして三つ目は、施設の目の前に広がる不忍池の湖上で泊まることのできる「宿泊空間」である。また、施設全体的には不忍池に浮かぶ蓮の葉や周囲に神社などがあることから、「和」を意識したデザインとしている。

「オアシス空間」では、あたかも森の中で鳥と触れ合っているように感じられるよう不忍池に面してガラス張りとし、樹木の幹に見立てた構造の上部に鳥の種類に応じて温室を分けて鳥を放す計画とした。来場者は、樹木に見立てた幹にあるエレベーターで半球体の温室まで上がり、各温室に移動しながら、鳥を眺め、触れ合うことができる（写真2）。

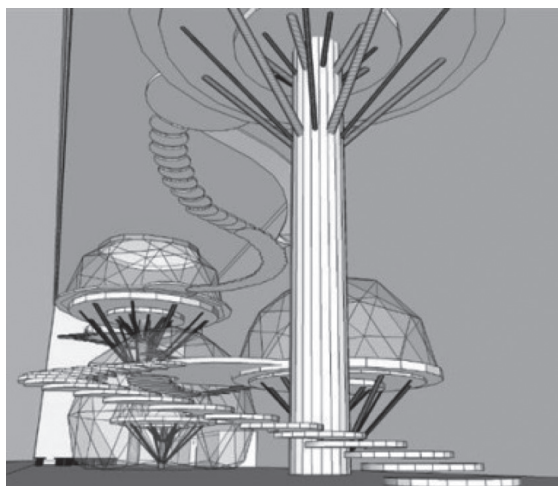


写真2 円形ユニットから成る施設

「温浴空間」は、「オアシス空間」と「宿泊空間」の間に配置されている。その外形は、円柱の形となっており、建物の中には鳥が入っているガラスケースがある。そのため、利用者はほぼどこからでも自然を感じながら過ごすことができる。

湖上に配置した「宿泊空間」は、水の波紋を意識し、円を基本とした曲線で構成され、不忍池との一体感を図っている。一人用と恋人、ファミリー用の2種類の客室を用意し、形状は、「オアシス空間」と同様に半球体にして、施設としての統一感を持たせている。

上野という新旧が入り混じる土地柄を活かし、人々がリラックスできる「オアシス空間」と「温浴空間」、そして、「宿泊空間」として鳥と戯れることのできる複合施設であるが、この3つを融合することで、新しいものを生み出そうと意図した作品であり、効果的なプレゼンテーションを用いて表現された作品である。

「Nénuphar クロード・モネの水上美術館」

中村 莉子

印象派を代表するフランスの画家クロード・モネ（1840-1926）（以下、モネという。）の代表作『睡蓮』は、極めて有名な作品であるが、1895年から1926年に渡り制作された睡蓮を題材に描いた一連の絵画の総称である。200点以上にも及ぶこのシリーズは、自ら自宅の日本庭園を意識して設計し、作った庭を模写したもので、同じような構図が多く存在している。同一のモチーフを繰り返し用いながら、季節、天候、時刻などによって微妙に移り変わる光の効果を捉えているのが、『睡蓮』の特徴でもある。このような表現方法は、後の作家にも多大な影響を与えている。

中村さんは、東京都台東区の上野公園内の不忍池の一角に、モネ及びモネのオマージュ作品を飾る美術館を設計した。作品タイトルは、その名も、フランス語で「睡蓮」を意味する。睡蓮の花をモチーフとして不忍池の湖上に建物を配置している。そこには、同じ風景を時間や視点を変えて描いたモネの作品と共に、季節や天候、時間の移ろいを感じられるような意図が込められている（写真3）。



写真3 展示風景

建物の形状は、睡蓮の花の形状を単純化、図形化し、2つの長方形が角度を変えて重なるように組み合わせることで、花びらが折り重なる様子を表現している（写真4）。建物のボリュームとしては、この2つの高さや

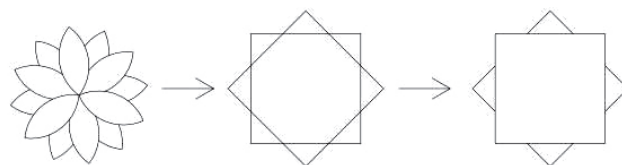


写真4 ダイアグラム

材料の異なる立方体を組み合わせることで、内部空間にもそれぞれに個性を持たせている。また、このボリュームも柱を立てて水面から浮いたように計画している。

建物は、受付兼作業室の棟と5つの展示室が湖上に配置され、各展示室を楕円の通路でつなげた構成になっている（写真5）。各展示室は、先に述べたダイアグラムの考えに従い構成されるが、それぞれ光の入り方や影のつき方、外観・内観の見え方に変化をつけるために、壁の有無やガラスの開口部の位置を少しずつ変化させている。つまり、時と共に見え方が変化するモネの『睡蓮』の表現方法を建物として具現化することで、展示物と対応して、その室内空間も様々な変化が生じるよう計画されている。さらに、展示室をとり囲む中央には、睡蓮の浮かぶ不忍池（スイレン池）が実物として存在しており、その対比も展示方法に、深みを与えている。

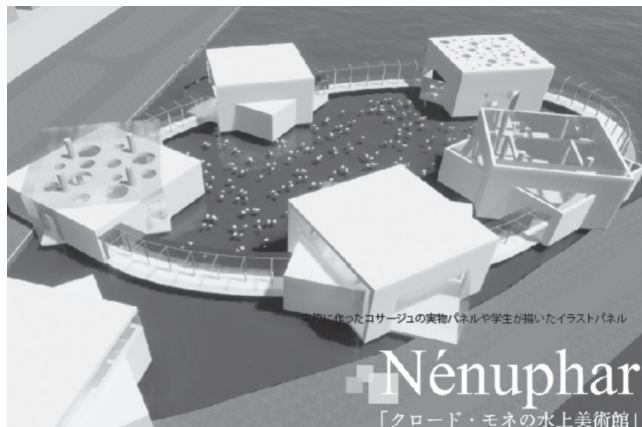


写真5 外観パース

非常にシンプルな建物の構成・形状ではあるが、その中にモネやそのオマージュの展示作品と計画した建物の内部空間に共通点を見出し、壁面とガラス面の構成のバリエーションを豊富にすることで、「見え方」や「感じ方」の違いを来館者に感じてもらうという意図が展示物の表現方法とリンクしており、面白さを感じることができる。

「Lien～集い、繋がり、共存できる宿泊体験施設～」

澤柳 美海

これまで「人と人のつながり」を卒業制作のテーマに取り上げる学生は多く存在する。コロナ禍になり、その重要性を自分の経験として改めて実感した学生も多かったように感じる。

澤柳さんは、神奈川県相模原市緑区にある敷地に、

周辺の自然を活用して、人と人がつながることができ、緑を感じることができる宿泊体験施設を計画・設計した（図6）。この敷地は、西に相模川が流れ、対岸に見える中洲には田園風景が広がる。北や東には樹木が茂っており、南には民家が立ち並ぶ。このような相模原の自然を活かしながら様々な人たちが集まり、たくさんの体験を通して、つながることのできる宿泊体験施設を設計した。



写真6 展示風景

施設の全体的な形状は、この施設が森や川などの自然に囲まれた土地であるため、全体的に葉の形状を意識し、曲線を使って自然の中になじめるようにしている。用途としては、ものづくりが楽しめるアトリエやクラフトルーム、自然を学ぶことができる学習スペース、濃密なコミュニケーションを形成できる宿泊施設や屋外炊事場、イベントのできるホールやプラネタリウム、そしてカフェやレストラン等で構成され、用途毎に内部空間を明確に分けることで、各種体験に集中できるよう配慮している。

個々の建物は、葉脈を模した形状の渡り廊下でつなげることで、互いの行き来や交流することが可能となっている。建物の外壁には、大きな窓ガラスを付けることで、室内にいても外の自然を楽しみながら体験活動ができるようにした。敷地には、全体的に芝生や木材を使用することで建物が自然に溶け込めるように考えられており、元からある自然と一体感が出るよう計画されている（写真7）。建物の高さについても、相模川に向かいボリュームを抑えるように周囲の環境に配慮した計画となっている。

この宿泊体験施設の特徴は、大人から子どもまで様々な自然体験ができるよう工夫されている。アトリエはアーティストの制作の場になることはもちろん、クラフトルームでは、施設の利用者がアーティストから直に制作方法を教えてもらうことができるように

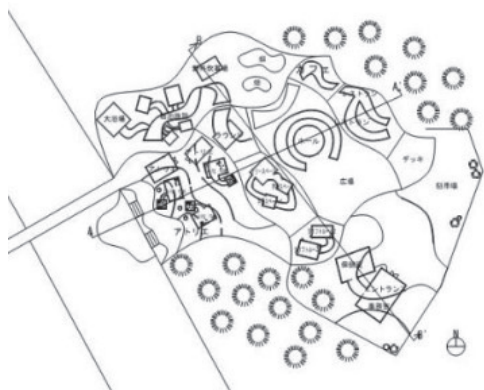


写真7 配置図兼1階平面図

なっており、アーティストとの交流やクラフトやアートをより身近なものとして感じ、より濃厚な自然体験をすることができるようになっている（写真8）。

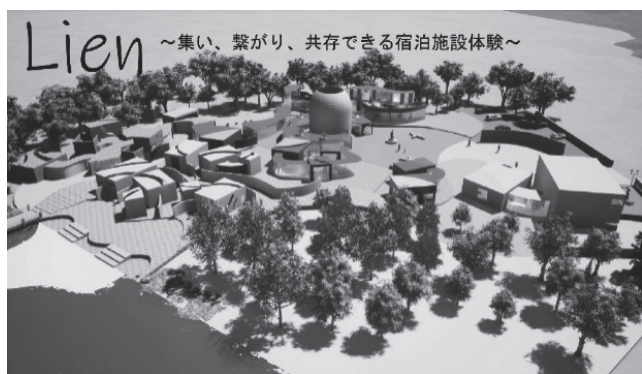


写真8 外観パース

創作活動だけではなく、共同の炊事や宿泊という行為を通して、人々が集い、人々とのつながりが強まるという点に着目した点が、非常に説得力があり、設計された施設に対しても、周辺の環境に配慮した計画が練られている作品である。

7. 人間栄養学部人間栄養学科

江川 賢一

令和3年度実践栄養プロデュース実習（運動生態学研究室）

令和3年度学生成果展に運動生態学研究室で実施した実践栄養プロデュース実習の成果を出展した。本稿では展示内容の概要を報告する。

運動生態学研究室は運動生態学を標榜したわが国最初の研究室として、平成30（2018）年に開設された。学部における管理栄養士養成課程専門基礎科目「運動

生理学」、専門発展科目「スポーツ選手の栄養学」、大学院における「運動生態学特論」をはじめとして、人々の運動と健康に関する教育研究を展開してきた。昨年度の学生成果展では現代生活学部健康栄養学科4年次の「実践健康栄養プロデュース実習」において1回生（平成28（2016）年入学）3題および2回生（平成29（2017）年入学）8題を出展した。

人間栄養学部人間栄養学科3年次と4年次に配置されている「実践栄養プロデュース実習」では、アスリート、ジュニア選手のほか、一般向けに広くスポーツ栄養を普及するために「スポーツ栄養サポート活動」を実施している。この活動はスポーツ栄養に関する教育と、運動生態学研究室スポーツ栄養研究会のフィールド研究として実施している（写真）。

3回生（平成30年入学）はコロナ禍において活動制限がある状況で実施可能なテーマを模索した。学生自身の出身高校では「高校女子ソフトボールチームにおける栄養教育が試合期の食生活に及ぼす効果」（横田絵里香，葛祐香，森池あおい）について簡便なパンフレットの配布でも選手の食生活が変化することを報告した。学生と交流のある大学では「男子大学野球選手における試合期の練習と試合当日の補食の摂取状況」（上田瑚子，高橋和枝）から練習日も試合当日も補食を摂取していることを報告した。学生自らが試験食を摂取した「アトピー性皮膚炎の既往歴を有する女子大学生におけるたんぱく質付加食がかゆみに及ぼす影響」（渡辺夢季，佐藤美友希，中津川真由）では、1週間の短期効果を認めた。コロナ禍での活動制限の影響を「女子大学生の食生活と健康状態の関連性」（笹川菜々子，佐々木星奈）から検討したところ、朝食欠食の問題が明らかにされた。



写真 「実践栄養プロデュース実習」パネル展示風景

令和4年度はスポーツ栄養関連の研究成果を第68回アメリカスポーツ医学会（サンディエゴ）、日本スポーツ栄養学会第8回大会（相模原市、相模女子大学）、第44回ヨーロッパ臨床栄養代謝学会（ウィーン）のほかに、学生発案のテーマについて第77回日本体力医学会（宇都宮）で発表した。また、人間栄養学部コホート研究「管理栄養士養成課程における女子大学生の運動・食習慣は学業成績と関連するか？」の成果を国際栄養学会議（ICN2022）で発表した。今後、スポーツ栄養学を中心課題とした本実習から、運動生態学の普及・発展に貢献することが期待される。

8. 人間栄養学部人間栄養学科

加藤理津子

千代田区における和食文化・芸術の体験プログラム開発に関する研究活動

1. 研究活動の背景

本学では、千代田区の様々な事象を多様な切り口で調査・研究する「千代田学」に参加し、区と連携して研究活動を行っています。

千代田区は政治、経済において先進的であると同時に、江戸時代からの文化資源を要するなど多面性も持つ地域であり、食の面においても和食文化を支える老舗が多いことが特徴です。人間栄養学科では令和元～2年度にわたって和食の伝統文化を切り口に学生が千代田区内の老舗や専門店を巡って取材し、千代田区の新なる魅力を発掘する活動を行ってきました。そして、その成果物として「千代田区和食文化体験プラットフォーム」を開発し、ホームページ「たべちヨダ (<https://tabechiyoda.com/>)」を立ち上げました。本ホームページでは、千代田区内で和食の伝統文化を見たり、味わったりできる場を紹介するだけでなく、学生の視点から商品や文化、店主の想いをまとめた取材記録を掲載しています。千代田区に通学しているながら地域を知る機会のなかった学生にとっても、管理栄養士として必要な素養である地域への理解、社会資源を探索して発信する力を養う貴重な機会となりました。

2. 令和3年度の活動内容

(1) 千代田区内店舗との商品開発

政府が新型コロナウイルス感染予防のための「新しい生活様式」を推奨した結果、人々の食の消費行動が変化しており、特にテイクアウト、デリバリーといった中食利用率の上昇は今後も続くと考えられます。そ

こで、和食文化体験の拠点を記した「たべちヨダ」を地域資源の循環に活用することを目指し、千代田区内の店舗と共同で新商品の開発を行いました。開発にあたっては、学生が店主に取材し、その内容を具現化することを目指しました。協力店と完成した新商品は以下の通りです（表、写真1）。

表 協力店舗と新商品

店舗名	新商品
レストラン1899 御茶ノ水 (千代田区神田駿河台3-4)	六煎茶セット
神田淡平 (千代田区内神田2-13-1) 天野屋 (千代田区外神田2-18-15)	江戸味噌せんべい
宝来屋 (千代田区九段南2-4-15)	うぐいすあんのほうじ茶 どら焼き



写真1 学生が開発した新商品

(2) 新商品を活用した食育活動

子どもたちに食べることを楽しむ心を育む、和食文化やモノづくりへの興味関心を高める、表現力などの感性を養うことを目的に、新商品を活用して東京家政学院中学校の生徒を対象とした和食文化体験プログラムを開催しました（写真2）。



写真2 和食文化体験プログラムの会場

まず、各商品を開発した学生が商品開発の過程および商品について説明した後、生徒に商品を配布しました。なお、試食は感染症予防対策のため各生徒の自宅で行ってもらいました。また、生徒には、新商品についての食レポ記事と商品や店舗をイメージしたデザイン画を作成してもらいました。

生徒から提出されたデザイン画の中から投票で5作品を選出し、その作品をプリントしたエコバッグを制作しました。各協力店にエコバッグを配布し、環境に配慮した販促グッズとして活用していただきました(写真3)。

新商品やエコバッグの制作にかかわった学生や生徒にとっては、和食文化や地域資源に対する関心を高めると同時に、若い世代が食の文化を伝える機会となりました。また、本活動は、千代田区内の店舗と地域住民や利用者とのパイプ役を担い、地域の活性化やイノベーションに貢献できたと考えられます。



写真3 完成したエコバッグと店舗での販促活動